

磐城石川附近風土雜記

菅谷泰昌

○氣候 石川小學校觀測所に於ける大正十五年度の調査は左表の通りである。

月別	雨			風				溫 度	
	總量	最多量	數日	無	疾	和	軟	強	平均
一月	四、〇〇	四、〇〇	一	八	八	九	六	〇	四、七
二月	二、二〇	二、二〇	一	七	八	四	九	〇	六、七
三月	五、一〇	一四、五〇	七	三	六	五	七	〇	九、五
四月	一七、〇〇	八五、〇〇	八	一	四	三	二	三	一五、二
五月	七、七〇	三〇、五〇	七	二	六	七	二	三	二五、二
六月	六、二〇	一七、〇〇	七	九	〇	九	二	〇	二四、三
七月	一四、五〇	三三、八〇	九	九	一	八	二	〇	二六、八
八月	八、四〇	四七、五〇	五	三	二	二	一〇	五	三〇、四
九月	八、六〇	一九、〇〇	三	二	三	五	九	一	二五、三
十月	八、四〇	一四、六〇	二	一	四	三	三	二	一六、七
十一月	一四、二〇	八五、〇〇	五	八	二	六	三	二	一六、一
十二月	三、三〇	一六、〇〇	二	七	二	六	一	二	四、六

磐城石川附近風土雜記

○地質 石川町附近の地質は變成岩、水成岩、火山岩に大別することが出来る。變成岩に屬するものには片麻岩及雲母片岩の如きものにして此種の岩石は所謂領家片麻岩系に屬するものである。

水成岩に屬するものは多く新しい時代の沈澱成層に成る第四期層の洪積層及沖積層より成るのであつて、洪積層は石川町の西邊に臺地を爲して發達し沖積層は溪澗の流域の中、北須川、今出川に於ける河成沖積層が是れである。火成岩に屬するものは花崗岩であつて花崗岩は其各所に Pegmatite を挟んである。

此の Pegmatite が石川をして稀有礦物即ち水晶、長石等の産地として知られて居る所以である、此の地方は花崗岩地帯とも云ふ可き區域であつて其大部は此の岩石によりて占められてゐて、古來から

石川に過ぎたるものに四つあり、坊主山ふじ石からすと云はれた有様である。以上は斯界のさる學者からも聞いた説である。

然して石川郡に産出する鐵物を石川郡誌によりて擧げて見やう。

名稱	色	光澤	成分	産地 町村名	摘 要
白色石英	無	玻璃	硅酸	石川、野木、澤、大森、山橋、須田	花崗岩、片麻岩、石英斑岩等ニ存在ス
黑色石英	黒	同	同	石川、野木、澤、山橋	
黄色石英	黄	同	同	野木、澤、山橋	
紅石英	淡紅	同	硅酸ニ化	石川、山橋	
紫石英	紫	同	同	山橋	
乳石英	乳白	同	同	石川、山橋	
鐵石英 赤褐黃 脂肪			硅酸酸化 鐵ヲ含ム	阿武隈川、野木、澤	地上ニ露出散在シ又ハ河岸ニ散在スルモ赤玉トナリ稀
石英砂		玻璃	硅酸	小瀬川、野木、澤、山橋	地表ニ散在スルモ崩解セルモ
水晶	無	同	同	須田、野木、澤、山橋	岩ノ崩解セルモ
紫水晶	紫	同	同	蓬田、小瀬川	

輝鐵	電氣石	黑雲母	白雲母	正長石	羊蛋白石	蛋白石	五	瑪瑙	黑水晶
石灰 綠、黒	濃綠、黒、褐、白	暗綠、黒褐	綠、淡、灰、紅、黄	白、肉、白、肉	黄褐色	黄褐色	白、黄、赤、黒、等ノ集合體	白、灰、黄、赤、黒、等ノ集合體	黒、煤、褐
	脂肪	同	眞珠	眞珠	同	脂肪	同	脂肪	同
	十二元素ヨリ成ル複雑ナル硅酸鹽	同	カリウムノ含水硅酸鹽	玻璃加里ノ硅酸鹽	同	含水	同	同	同
蓬田村	石川、野木、澤、大森、山橋、須田、中谷	同	石川、野木、澤、大森、山橋、須田、中谷	阿武隈川、山橋、須田、野木、澤、大森、山橋、須田	北須田、阿武隈川	野木、澤、山橋、須田、小瀬川	泉	泉	石川、野木、澤、大森、山橋、須田
本礦ハ陽起石ナリト云フ學者ア	花崗岩片岩等ニ存在ス		花崗岩片岩等ニ存在ス	花崗岩片岩等ニ存在ス	稀ニ認ム				

紅柱石	石	滑石	綠泥石	蛇文石	綠簾石	榴灰礬石	榴貴石	柘榴石
灰綠褐 眞珠 ムノ砒酸鹽	赤白黃 玻璃 カルシユウ 須釜。大森 田。石川。	綠白 灰黃 絹糸 石炭。苦土 酸礬土。砒 川。大森。淺	暗綠、 綠青赤 無珠 酸礬土	綠白。綠 暗綠。 眞珠。 無珠。 ウマ。グ ネシ。	綠。黃 赤。綠。 金剛。 鐵。カル シユ。須 釜。中。谷 橋。白石。 山。淺川。	脂肪	紅 玻璃 酸礬 フロン。ン プ。砒	赤。黃 綠。白。脂 肪。玻璃 アル。ミ シ。ウ。ム ム。アル ミ。ニ。ウ ム。マ。カ 澤。石。川。 野。木。 東。山。橋 淺。川。
シ。母。紅 色。ニ。モ ノ。多。	斜。方。柱 狀。岩。脈 中。ニ。結 晶。品。	小。鹽。江。 泉。大。森 田。淺。	淺。川。	大。森。田。 中。谷。橋 山。淺。川。 澤。田。	中。谷。村。 野。木。澤 村。	石。炭。岩 ト。花。崗 岩。ヨリ。産 出。	野。木。澤。 東。	花。崗。岩 ヨリ。出 産。

孔雀石	斑銅	黃銅	鐵	黃鐵	褐鐵	磁鐵	方解石	砂	青	綠柱石
鮮綠 眞珠。子 銅。含。水 銅。岩。	紅 金屬 同。	金赤 金屬 同。	黑鐵 金屬 同。	黃 金屬 同。	褐 金屬 同。	鐵 金屬 同。	白。動。赤。 無。玻。璃 無。玻。璃	黑 鐵 同。	青 玻璃 同。	淡。青。淡。綠。 黃。白。綠。白。 玻璃。脂肪
銅。含。水 銅。岩。	同。	銅。化。物 同。	鐵。化。物 同。	鐵。化。物 同。	鐵。化。物 同。	鐵。化。物 同。	炭。酸。カル シ。ウ。ム	鐵 同。	酸。化。アル ミ。ニ。ウ。ム	アル。ミ。ニ ウ。ム。ノ。砒 酸。鹽。
小。平。	小。平。	須。釜。	石。川。大 森。田。淺	淺。川。	淺。川。大 森。田。淺	淺。川。大 森。田。淺	山。橋。 小。鹽。江。	中。谷。村。	大。森。田。	須。釜。野 木。石。川。
本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。	本。郡。產 出。ス。

砂金	滿庵鐵	石墨	亞炭	ビコ	モ	ザ	チ	ナイ
金	鐵	鉛	炭	漆	暗	黄	黄	赤
金	鐵	鐵	素	黑	赤	金	樹	樹
金	屬	屬	素	金	金	剛	脂	脂
マン	ノ	炭	室	ニ	セ	ノ	チ	酸
酸	酸	素	素	ラ	リ	燐	タン	鹽
化	物	素	素	ブ	ウ	酸	カル	シ
蓬	田	淺	淺	石	石	野	山	山
野	淺	川	川	水	水	水	白	白
澤	川	江	江	澤	澤	澤	石	石
本	塊	多	普	平	ノ	ス	岩	岩
郡	チ	クハ	通	板	中	川	石	石
少	爲	片	炭	柱	ニ	流	ノ	ノ
量	シ	岩	層	狀	コ	砂	副	副
ニ	テ	中	爲	チ	ロ	中	成	成
之	現	ニ	シ	ナ	共	生	分	分
チ	ハ	墨	ズ	シ	生	中	ト	ト

以上産出する礦物は其量夥大ならざると一方運輸狀態の不備とに相俟ちて、廣く採取されない。長石の如きは一時名古屋方面の陶磁器會社で採鑿されたこともあつたが前述の理由に依つて、今では廢絶されてゐる。

石川町北方約十三軒の處の阿武隈川に第三紀層中に岩床を爲せる角閃安山岩に懸る乙字澤と云ふのがある。東洋のナイヤガラとも稱せられて有名である。古くは石川瀧とも或は瀧

崎瀧とも云ひしが明治中期上野龍臣氏に依りて乙字の瀧と名付けられしものと云ふ。

さみだれに瀧ふりうつむみかさ哉 芭蕉

○聚落の形式 此地方は開墾された山野に依つて滿たされてゐる故に概ね散村の形式を資つてゐるものが多い、交通の要衝に當る處が幸じて街村の形式に依りて聚落を形成されてゐる。

○人口に就いて 石川郡に於ける一戸當りの人口は左の如し但し大正十二年末現在に依りて計算す。

石川町	五、八二	蓬田村	四、九三
澤田村	六、五八	小平村	五、三三
野木澤村	七、三八	母畑村	六、〇九
泉村	六、一九	中谷村	六、一七
川東村	七、五三	山橋村	八、五〇
小瀧江村	五、六八	山白石村	六、一〇
大森田村	七、八六	淺川村	六、七九
須釜村	六、六〇		

昭和元年末に於ける石川町及野木澤村の人口及戸数は石川町人口二、六九一戸數九九六戸。一戸當人口五三四人野木澤村人口二、三三二戸數二六六戸、一戸當り人口八、七七人である。

此地方一體に一戸當りの人口多き傾向あるは畢竟、往昔の大家族的傾向を幾分遺し傳へたるものと見る可きものであら

うか。

此附近の住民の移住線路に就いては姓氏考の項を参照せば
幾分察するところあらんと思ふ。

○家屋に就いて 石川町を中心とせる此地方の住家の間取は
概ね下圖の様式である。圖は野木澤村鹽澤曲山某氏の邸宅で
ある。

此邊の習慣として 入口の方を眞南に向けることを嫌ひ、
可成辰巳の方へ向ける様にするのである。又縁側等は押組に
張る。

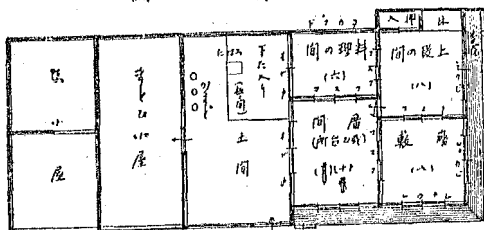
一體近畿の方は燕口の張方を爲し關東方面から、こちらに
掛けては押組に張られる傾向がある様である。

戸袋の作りを「センガイ」作りと云つて面白い曲線を使つて
ゐる。又挿木の小口は青い顔料で塗つてゐる。

「まとい」小屋と云ふのは、經め小屋の轉訛であらう。農作
物や農具の物置のところである。圖中部屋々に書き入れた
名稱は此邊の俗稱を著したものである。料理の間と云ふのは
疊が敷いてあつて、納戸の役をしてゐる室である、廣間と云
ふてゐるのは、北陸、近畿邊で云ふ「テイ」で板の間の「茶の
間」である。一體に奥行の長い家が多く、甚だしいのは其長
さ四十五米突に及びしものがあつた。

石川附近の屋根のタイプは隣郡田村郡守山、谷田川附近の
と（本誌第六卷第三號に掲出す）同様である。棟の小口（此邊
では俗にサスと稱してゐるらしい）の火爐形にして八字の區

第一圖



劃ある型式は隣國常陸國久慈郡の上小川驛附近を中心として
多く存在してゐる、即ち該地方から將來されたものでなから
うか。棚倉に僅かに此の

型の影を留め、此から以
北には、もう此の型は見
ない。私の狭い見聞では
此の火燈八字式の型は尙
上總一宮附近と上總興津
附近及び相州鎌倉の郊外
で見た。

石川附近の凡ての渡邊
姓は其屋根に樓煩出しは
勿論の事、一切其他の煙
出しを作らぬ習慣がある
とのことである。

○地名考 石川郡或は
石川町の地名に就いて些
か贅言を費やさう。和名
抄には已に白河郡の中に
石川なる郷名を挙げたれ
ば古くから此名があつたらしい。吉田東伍博士は現今の澤井
村、山崎村、石川町の地が當時の石川郷であつたらうと考證
されてゐる。南北朝時代の一、二の古文書に石川郡と記され

しもの見ゆれども之は地方の豪族の類が私かに稱したものであつて當時は石川庄と呼ばれ南は今の東白河郡宮本村竹貫村、鮫川村より北は泉村に至り西は淺川村西白河郡滑津村、中畑村とか東蓬田村須釜村に渉るの地域を汎稱したものであらうと石川郡誌等にも言はれてゐる。而して白河郡より分立して石川郡と稱せらるゝに至りしは文錄以後慶長年間なのであらう。

和名抄時代から石川なる郷名は存したらしいが是を擴大して遂に白河郡から分立せしめて郡名に迄になりし原因は石川氏五百年廿四世の治下なりし故であらう。

即ち石川氏は多田滿仲の孫頼遠、有光を祖とし河内國石川郡泉莊を食んでゐた、前九年の役に此地方に戰つて功あり康平六年當地石川庄を賜はり奥州山東の軍事を司り從五位下安藝守に任ぜられ、石川庄に三芦城を築いて君臨した。石川氏の系圖には、此時白河郡内改三石川郡と云つてゐる。

恰も天正年間に攝洲佃島の漁夫達が武藏の一角に移住し附するに故郷の名佃島を以てし藤堂和泉守が其居城甲賀の上野の地名を江戸の屋敷にも移せるが如く石川氏も故郷を忘じ難く舊領の地名を望みしか或は故郷の名を特に擴大して系圖にあるが如く白河郡内改三石川郡とせるに至つたものか。因に石川氏菩提寺の存する處を泉村と稱す、これも河内泉莊に因みて名付けられたものであらう。

石川氏より出でたる一族に泉氏、藤田氏、大寺氏を稱する

ものは皆此附近の泉村、藤田、大寺等に居を構へしを以て其地名を冠せるものである。

○姓氏考 石川町は字五十二、三を有するも古來之れを四部落に分類してゐる、即ち其各項に分ちて按じて見やう。

○磐城國石川郡石川町富田 瀬谷、西牧、中村矢内、鈴木、綠川、近藤、近内の諸氏多し就中瀬谷、西牧、中村の三氏は舊家であると言はれてゐる。

○瀬谷氏—原因未詳 西牧氏—信濃より起りし木曾義仲の次子義重の男義信の後也と稱するものがあるが果して之に類するものゝ裔か。

中村氏—此姓氏は其種類甚だ多くして今一途に判じ難きも當地附近より起りたるものゝみを舉げて他山の石としやう。

一、陸前 吉彌侯部裔なる上毛野中村公なるものがある新田郡中村郷より出づ。

二、常陸 鹿島郡中村郷より出でたもの

三、同 眞壁郡中村から起つた藤原北家山陰流と云ふ一族がある。

四、武藏に起れる平良文の裔なる江戸氏族中から出たもの

五、武藏から起つた春日氏族横山黨及丹黨族のもの

六、安倍氏族佐々木氏流から出たもの

矢内氏—出自未詳
鈴木氏—此地方は石川附近に限らず郡山、守山方面に於ても此姓氏甚だ多し。

鈴木氏は其出自の種類甚だ多い。私の考へるところでは、此地方は延暦年間坂上田村麻呂の鎮守府將軍として來た所で永正年間迄其子孫田村氏は田村郡守山に居城して武威を奮つて其一門一族の繁榮した所である。

所で坂上氏は抑も漢高祖皇帝の裔で其支流に坂上土師氏があり其の土師氏から出てゐる鈴木氏がある。即ち田村麻呂の子淨野は其曾孫古哲に至つて田村氏を稱してゐる即ち守山の田村氏の祖である、淨野の弟正野の曾孫は河内國にあつて、土師氏と稱せられ其子は鈴木三郎維親と云ふて鈴木氏の祖となつてゐる。で此地方の鈴木氏の祖は是れてあつて、田村氏を頼つて來、田村氏の繁榮に伴ふて寄生的に蔓延したものでないかと思ふのである。

縁川氏——出自未詳

矢吹庄に住せる縁川源左衛門なるもの安政二年に舊主石川

義光(石川氏十四世)の建碑を其筋に願出た文の中に

「私先祖は石川家御連校川尻肥後守光顯公より代々大將家御一族にて縁川出に御座候處大和守昭光公御代に至り天正十八年石川御立除き後宗家縁川刑部様は御當地(伊具郡角田のこと)へ引移り其分流等は御細領又は近國近郡に土着罷在候云々」

とあるに依りて知られるが如く縁川氏は石川氏或は氏の一族の重臣なりしこと明かにして石川氏伊具郡角田に轉封するや縁川氏の一族も共に移りしもの殘留せしものとありて

當地のは即ち後者に屬するものであつて現石川町長縁川喜一家も後者に屬する石碑を持つてゐる。紋は丸の中に吉の篆字である。

近藤氏——概ね藤原北家から出でたもの多く異種として僅かに甲州より起れる清和源氏武田氏族と信州より起れる村上氏族、豊後に起れる三輪氏族緒方氏流あるのみであるが最も其種類の多いのは江州から起つた秀郷流の氏族と云はれてゐる。此の近藤氏は其何れより出でたるか。

近藤氏——所因未詳

○同上石川町下泉

鈴木、溝井、三瓶、小豆畑、吉田、荒川等の姓氏多く就中舊家と稱せらるゝは鈴木莊右衛門家。溝井氏の二氏である。鈴木氏は上記の如し。

溝井氏——所因未詳

三瓶氏——所因未詳

石見國安濃郡に三瓶山あり往古は佐比賣山とも形見山とも稱せり、又石見、出雲地方にも此の姓を見たる記憶がある三瓶は竿部えんべに音通ず。元來竿部とは算道の事に與る女人を云ふものであるらしい。類聚符宣抄第七に出でたる竿部保理なぞ云へるは即ち此の種の職業婦人の裔なのであらうか其竿部の三瓶に變じたるかは俄かに斷じ難きも後考の料にものと擧げて見た。

此姓氏は安積郡倭川邊の阿武隈川沿岸にもあり。

小豆畑氏—姓氏錄未詳雜姓和泉の部に小豆首（吳國人現養臣之后也と見ゆ）及び此の裔なる小豆氏及び羽後鹿角郡小豆澤より出てたる小豆澤氏のみは知られてゐるけれど此姓あるを見ず。

吉田氏—田村郡守山町大字守山にも此姓多し、本誌第六卷第三號磐城守山附近風土雜記中の姓氏考を參照

荒川氏—概ね清和源氏にして藤氏秀郷流之に亞ぎ他は僅かに安倍氏族がある。當國磐城郡荒川郷より起れるものゝみ獨り桓武平氏にして磐城氏族である。即ち此氏に屬するか又安倍氏に因めるか。

○同上石川町外楯

泉。前田、小松、有松、遠藤の姓多し。就中、泉重左衛門家は舊家と云はれてゐる。

泉氏—當國より起りたる泉氏に二種あり

一、相馬郡泉より出でし相馬氏族

二、石川郡泉村より出でし石川氏族

當地の泉氏は當然後者であらう。尙地名考の項に於ても述べてゐる。

小松氏—羽前から起つた安倍氏族のものがある。

有松氏—所因未詳

遠藤氏—攝津、遠江に其氏族多し。今其何れなるや知り難きも倭漢氏族の坂上士師氏即ち田村氏の支流鈴木氏の先は攝津にありし事あり（其子孫今尙攝津に止まれるもある）又石

川氏の攝津河内地方より起れるを知れば幾何か一縷の奇縁を藏するが如く思惟されぬでもない。

○同上石川町新田

鈴木、大平、矢内の姓多し。然して鈴木、矢内の兩氏は前項に既に述べてある。

大平氏—岩代から出たものにオホタヒラと訓するのがある。

天武帝の裔高階氏族である。下野から起つた藤原北家宇都宮氏族はオホヒラと訓じてゐる、但し高階氏族でもオホヒラと訓じてゐるものもあるらしいが其起りたる地を明かにしない。

○同上石川郡野木澤村中野

近内、二瓶、圓谷の姓氏多く僅かに矢吹氏が比較的多く混つてゐる。近内氏は前條石川町高田の項參照のこと。當地に於て、近内氏は其同姓二十五、六戸の大きさに達す。

二瓶氏—二十五、六戸あり其宗家は當地に於て最も舊家と稱せられ現在十六七代に及ぶと云ふ、所因未詳。

二瓶氏に音相通ずる姓に贊氏あり、伊豫から起り其先、贊首であつて武内宿禰葛城臣の族と稱せらる。

又贊氏に藤原氏と稱する氏族がある家紋數瓦の内に三頭左巴鈎鐘

又古往磐城郡の豪族に贊田氏がある。

當地の社家二戸は二平と書き習はしてゐる。

圓谷氏—十軒計あり所因未詳。

矢吹氏―石川にも僅かに此姓がある。所因未詳、白河古事考

に淺川に居城してゐた矢吹薩摩守なるものゝ名が見へる。

又角田氏の裔であつて清和源氏と稱する矢葦氏と云ふのがある家紋丸に七本矢車。

又白河以北に矢吹なる地名あり併せ記して後考の料に充てやう。

○同上野木澤村鹽澤

曲山、有賀の姓が多い

曲山氏―此の姓氏は泉村^{しゅうむら}生。中谷村形見にも多くある。然して所因未詳。

秀山鑛泉から約五百米突西方の鹽澤部落に曲山源助氏と稱する家がある。此家の裏山に此家の祖先の墓と稱するものがある。蘇苔文字を没して明かにせざるも次の如き字を讀み得られた。

文明十五癸年

鳳樹院殿高慶源公大居士位

人皇三十九代天智天皇□ 鹽澤

(面裏)

□先 吉村

□□三年卯八月十一日 曲山但馬守正義

有賀氏―東鑑承久記等に出でゐる有賀四郎父子四人云々の族

の裔では無いか。

若し此の族とすれば厥先信州諏訪明神より出でたりと云つて居る出雲神族であらう。

磐城石川附近風土雜記

○民謠 松川二郎氏は磐城七郷村(田村郡にして門澤、堀越

遠山澤、永谷、牧野、栗出、柗山)の盆踊りは姫奇會即ち歌垣の形式を造こしてゐるものであると云はれてゐる。

此地方の盆踊りも果して此に影響されてゐるものか、どうか知らないが其の調子の野趣満々たる中に優雅な捨て難い點を多く見出すのは愉快に感ぜられる。(聞説秋田地方にも其歌詞

と其調子の相似通ひたるものがあり又豊前善光寺附近の盆踊にも此れに相似たる調子のあるとの事である)然して此地方は盆では無くとも少し人の寄り集まりて興至れば直ちに大太鼓を打叩いて歌ひ踊ることが盛んである。

其歌詞の三、四を擧げて見る。

ハ―そるた―踊り子が揃ふたア―稻の出穂よりアラサ―

なほ揃ふた。

ハ―誰か来たよな垣根の外にア―泣いた鈴虫アラサ―音なと

める。

ハ―盆の十六日踊らぬ奴はア―猫が杓子がアラサ―花嫁か。

ハ―傘を忘れた峠の茶屋へア―雨のふる度アラサ―思ひ出す

ハ―峠参りと内をば出たがア―心峠でアラサ―身は矢吹。

○雜項 子供生れて七日目に命名して次の様に半紙に書いて

廣間(家屋の間取圖參照)の長押に貼つて置く習慣がある。

昭和二年一月三十一日生

一、壽 名 貞男

火性男 千鶴萬龜

地球

第九卷

第三號

二〇八

四八

此の地方の婦人のタイプには美醜を論ぜず多くは俗に云ふ「おこ」であつて顔丸味勝ちである。體格頗る頑強で顔赤く一見懦夫を張り飛ばすの概がある。

石川町から東北約三軒の北須川の溪間に母畑鑛泉と云ふのがあつて、上の湯中の湯等と分たれてあて熱れも「ラヂウ・Aエマナチオン」を 10^{-10} C.H.単位を以て表せば約四〇

面積

地目	種別	面積	地積	地價
宅地	畑	八六、〇〇〇坪	四三、七一四	一八〇
田	畑	三九〇	五、八三三	九七
畑	畑	三八〇	二、五二九	三〇
山	畑	八〇〇	一、九六〇	四〇
原	畑	一〇八六	一〇九〇	九〇
池	畑	三三	〇	〇〇〇
鑛泉	畑	一歩	六	八五〇

主要産物

程含有すると云ふ。又石川町郊外に猫暗鑛泉がある。又野木澤村鹽澤に近年開かれた糸山鑛泉がある。共に皮膚病、婦人病等に効があるとの事である。
此地方の産物は何と云ふても蒟蒻と煙草を以て第一とする次に石川町に於ける面積と大正十五年の主要産物の大略とを擧げて見る。

品目	種別	數量	價格
蒟蒻	馬	六、九八八貫	五一、六二八圓
煙草	馬	五四頭	六、九一二圓
麥	馬	二、九八八石	九〇、三五一圓
米	馬	一、二二〇石	一三、三二四圓
蒟蒻	馬	三、八五九貫	九、〇三一圓
煙草	馬	三七、五〇〇貫	一六、八七五圓

備考 煙草ノ價格ハ賠償金ナリ

〇正誤

地球第九卷一八五頁上段第一行の同氏とあるは ARLAW 氏の誤でありました、會員野口喜一氏からの御注意を感謝します。